

テーマ

消えた湖・波根湖

事業実施地区（中学校区名）	大田市立第二中学校区
事業実施公民館等名 （中学校区内にある全ての公民館等）	東部公民館・西部公民館 （各まちづくりセンター…7館）

テーマの背景

波根湖とは、久手町波根西にあった周囲約4kmの潟湖のことで、昭和26年3月に干拓され広々とした水田に変わりました。その周辺の人々は、古くから経済的にも文化的にも様々な恩恵を受けて暮らしてきた。波根湖という、今は無くなった湖に様々な角度から迫り、地域の大人が調査・学習し、波根湖との関わりを改めて見つめなおし、まとめることで、地域で暮らす方々がふるさとを愛する心情を育むことにつなげていきたい。また、地域に残る教育資源として、次世代に伝えていきたい。

実際の取組

⑤ふるさとの「ひと・もの・こと」を次世代に伝え、守っていく活動の実施

事業名：「消えた湖・波根湖」パネル（A1）作成事業

<取組の概要>

1. テーマ「消えた湖・波根湖」についての資料（パネル）作成にあたり、共通認識と内容についての意見を各委員から伺い、検討して方針を決定した。
2. 資料（案）を元に内容の検討・編集作業を一次、二次にわたって行う。写真の選別と文章の検討（一次）、写真の決定とパネルの順番の検討（二次）
3. 資料を基に検討委員の皆さんから、再度ご意見を頂き、再編集と校正作業を行った。併せて写真・図版等の著作物許諾申請作業を開始した。
4. ふるさと教育展示資料「消えた湖・波根湖」（A1サイズパネル）が完成した。

<成果と課題>

今年度は、資料収集に時間がかかり、教育資料作成にとどまったため、学校やまちづくりセンターでの発表会や展示等の掲示ができなかった。

次年度は、学校での学習や各まちづくりセンターでの展示等、子どもから大人まで使える「ふるさと教育資料」として活かした事業展開を行っていきたい。



消えた湖・波根湖

はねこ

国道 9 号線を大田から大田二中を過ぎて少し走ると、左前方広い田んぼが見えてきます。かつて、ここに「波根湖」という湖があったことを、どれだけの人々が知っているのでしょうか。今、わたしたちが見るこの田んぼには、この湖が 1708 年（江戸時代）に新田開拓が引継がれてから、1861 年（昭和 26 年）に拓開事業が終わるまでの間で、1900 年の日露戦争を境として今田んぼになるまで、約 300 年間にわたる多くの人々の努力の跡があります。

波根湖の干拓事業は、大田市の歴史の中でも一大プロジェクト事業の一つであったと同時に、この事業をとおして得られた多くの知識や経験は、その後の、八郎潟干拓やその他多くの干拓事業に取り入れられ、日本の干拓事業のさきがけとなりました。

大田市において、このような事業があったことを、わたしは郷土の歴史としてぜひ知っておくべきだと思い、「波根湖の究」（島根大学汽水城研究センター刊）と、要約版「ハネッコ知ってますか？」（大田市教育委員会刊）を基に西福進して「ふるさと教育」の教材として授けようと思いました。

波根湖周辺に暮らした人々の営みはもちろん、市の産業である農業が、いかに多くの人の努力と工夫の上になりたっているか、あるいは、土と人、水辺と人の深い関わりなど、知っていただきたいと思っています。そして、今後、研究が進み新たな発見につながっていくことに期待します。

平成 30 年（2018 年）2 月
東部公民館・西部公民館

大田第二中学校ふるさと教育推進事業

波根湖ってどこにあったの？

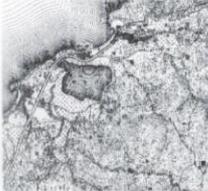



写真 1 大田の東側にお大田山から見た波根湖（提供：松原写真館）

波根湖は、島根県大田市久手町波根湖。今は広い田んぼになっているところもありました。船先の下拓が始まる前の波根湖は湖に大田、南に大田、高見、東に大津、北に柳瀬という島々にまわれ、周囲 4km、水深は約 3m ほどありました。北にある柳瀬というところで海とつながっていて、塩分を含んだ海水と川が流れ出した淡水が混じりあった汽水の湖でした。

地図 1 明治 33 年大日本帝國新聞社地誌年報



写真 2 大田第二中学校ふるさと教育推進事業

波根湖の農地開発はどのように行われたの？①

波根湖では瀬戸の開削で一帯に湖沼が狭くなり水位が下がると、河から流れ出した青洲をもとにした新田開拓が行われるようになります。

江戸時代中期の波根湖は、東西 1.6km、南北 0.8km の湖沼が広がっており、このうち 2～3m ほど深さがあり、広さの割に浅く、湖から小規模な畑を立てる上での水利用が行われていました。

寛政より上流部に約 2.8km の第 2 段工事、天明 4 年（1784）に完工します。

川崎家の郷土史記は 27 年間に及ぶが、天明 7 年（1787）川崎定安が郡山し、川崎金十郎も郷土の歴史に登場しました。この田を農地は金十郎の苦勞や仁政を假し、その恩を蒙るは鎌倉とな（休田地）（きゅうたくでんち）と奇で言い伝えられています。

近世の波根湖の農地開発は、おもに大田代官庁によって、また、近世以前には、有力豪家や幕府の令によって、小規模ですが続けられていました。

幕家の新田開発

石見郡山 32 代代官に、新田開発や治水土木に業績をもつ川崎平右衛門定安が、寛政 12 年（1782）に赴任しました。平右衛門は、新田の成と瀬戸開削の改善について開発計画書を幕府に提出し、郷土の川金十郎を責任者として治水工事や新田開発を行なった。

川崎平右衛門定安は、前代で開削したと伝わる瀬戸を改修して、れにともなう新田開発や、農耕していた農山の回復など数々の業を執り、6 年後の天明 4 年（1787）は江戸へ転出しました。

その後も定安は自治の地にとどまり、今の大田開拓を導くから大川を築って 190m 余りの所から北東に 500m、幅 200m の約 10.7ha と、堤防（渡部堤）で、今の近郊 1 町口の豊原 10ha から波根湖岸に約 700m に幅 40m の約 2.7ha の新田を完成させました。

その後、川崎定安が、37 代の代官として赴任します。西側から見て東側まで約 4km の下流部に約 0.8ha、大田川を築って大田



写真 1 石見郡山 32 代代官 川崎平右衛門

大田第二中学校ふるさと教育推進事業

波根湖にはどんな生き物がいたの？

波根湖の植物

北側から反時計回りに南西側までの範囲には、シシヤガマが生えていたと思われ、夏には、栽培されたヤマの種も生えていた。その種を除けば使ったといえます。北東側（柳瀬から大津）には植えては砂礫高さ 50cm ほどの石垣があり、石垣の隙間には草が殖えられ木になっていたようです。

波根湖の動物

干拓以前の波根湖に生息していた魚には、コイ、フナ、ボツ、ウヅ、シラサギ、ウツギ、エビ、タナゴ、ヌズメ、ウグイ、オノカマ、マハダ、カワガ、ナマズ、ドンコ、ドジョウ、メダカ、などがいます。



写真 10 コイ



写真 11 フナ

貝類には、タニシ、シジミ、カサガイ、タイガイ、などが生息していて、タニシは湖に産む水産物や水田に、シジミは砂利排水路や瀬川の閉鎖に多くいたようです。



写真 12 タニシ



写真 13 シジミ



写真 14 カサガイ

地層については、マゴモ、パン、シシなどの水鳥がいたことが知られています。地元の高老からの郷土誌では、カイヅブリやカワサギなどの名を明することができました。

地図 3 明治 37 年 安達源次郎氏手記地誌年報（波根湖部分）

大田第二中学校ふるさと教育推進事業

まとめ

テーマに迫るためのポイント

今、わたしたちが見る旧波根湖に広がる田んぼには、約 300 年間にわたって行われた干拓の歴史がある。この地の干拓事業は、多くの人々の努力の結果であり、大田市の歴史の中でも一大プロジェクト事業の一つであったと考えている。この事業をとおして得られた多くの知識や経験は、その後の、八郎潟干拓やその他多くの干拓事業に取り入れられ、日本の干拓事業のさきがけとなった。

今後の展望

波根湖周辺に暮らした人々の営みはもちろん、市の産業である農業が、いかに多くの人々の努力と工夫の上になりたっているか、あるいは、土と人、水辺と人の深い関わりなど、知っていただきたい。そして、今後、研究が進み新たな発見につながっていくことに期待したい。